

ペン俳句会 句会報(第三七四号)

令和七年十月二日(木)

兼題『月』、席題『実』

句会を、先月九月と同じ場所で開催。投句九名。

出席八名。(欠席は良知さん、金魚姫さん)

宮原 凧

ポケットに木の実集める下校の子

古(いにしえ)を手繰り寄せめて秋の風

秋出水流れ中州の耀けり

ほろ酔ひの一駅歩く月の夜

聖堂の窓に射し入る月明かり

夜の湯や胸の奥処(おくど)へちちろ啼く

浜口 金魚姫

渡り来る鳥には鳥の事情持ち

遠き地の君も眺める同じ月

てつぺんに月メタセコイヤの相似形

聞き返す仕草に秋の気配して

花は実(み)に望みは叶ふ古希の秋

手を合はず夫の背中に秋あかね

中村 晃也

陰深き瀬田の唐橋星月夜

ひぐらしの声絶へてより風の詩

けもの道木の実の落つる音ばかり

病床の窓月光に手を浸す

糸杉の先細りして月を刺す

月明り柄杓に受けし滝の水

新田 ゆふき

転轍機を覆ふ秋草小海線

奥山の宿に鹿鳴く秋の夕

竜胆の孤高の色や尾瀬暮るる

霧雨に煙る牧場の秋寂し

夥しい実を踏みて行く秋の山

いにしへの月を見し人涙して

松田 一文字

あかね空を数を増しゆく秋あかね

満月の海に伸びゆく光る道

荒海や陸(おか)の浜加子実の赤き

全山を覆ふ紅葉や奥の院

鮭銚を照らして蒼きけふの月

見事なる田んぼアートや豊の秋

安藤 晃二

雑談に倦みて二人や土手の秋

名月のウサギ張り切り四方照らし

コスモスの野を睥睨す大櫓

五位鷺の声荒るる河多摩の秋

秋深む赤き実の映え枯山水

秋夜更く物故者名簿時間止め

大津 そうかい

高層の窓拭く人や翳雲

父の実の父の遺影へ盆の月

マンホールの蓋名月を映やしをり

食卓の塗剥げし日赤まんま

秋の夜の小学唱歌ヲ才より

新蕎麦や出前機の揺れ優しかる

長尾 進一郎

彼方より電車の音や秋の宵

飛行機の貫き行くや秋の雲

夜半(やわ)の雨止みて庭ぢゆう虫の声

玄閑や迷ひ込みしか虫の声

大詰めの佳境小説夜長秋

庭に出て足音に止む虫の声

西川 知世

月代の窓の辺猫の甘え鳴き

紫蘇の実の卓に零れて二つ三つ

大屋根や更待月の影閑か

秋高しがちやりと開く車椅子

子の列に八千草の揺れひとしきり

戦禍続けり眉月の夜の涯

次回は令和七年十一月九日(木)。新宿御苑にて  
吟行。(兼題及び席題は無く、囑目。)

追記